

総研大 アジア冬の学校

鈴木 康 浩

総合研究大学院大学（総研大）・核融合科学専攻は、総研大アジア冬の学校を2020年1月27日から31日までタイ南部で開催しました。近年、総研大アジア冬の学校は、経済発展が目覚ましい東南アジアの優秀な学生を多数招へいすることを目的として、東南アジアの国々で行っています。本事業は、2016年度に、タイ・チェンマイ大学、タイ国家原子力技術研究所（TINT: Thailand Institute of Nuclear Technology）と核融合科学研究所との間で研究と教育に関する学術協定を締結し、そのネットワークを活用することにより可能となったものです。これまでに4回、タイにて開催しており、2017年度からはTINTが主催しているASEAN School on Plasma and Nuclear Fusion (ASPNF) と共催の形で開催しています。これは、タイが東南アジア諸国のハブとなり、核融合エネルギーに興味を持つ優秀な学生を多数招待することを可能とするものです。

本年度の冬の学校は、タイ・ナコンシータマサートのワライラック大学で行いました。ワライラック大学は、理工系教育の向上を目標に設立された比較的新しい大学で、最新の機材等が整備された素晴らしい環境でした。昼食は会場内で全員一緒にとることができ、講師陣と学生の距離が非常に近い、核融合を学ぶには最適の環境であったといえます。今回は、タイ、ベトナム、インドネシア、パキスタン、イラン、中国、及び日本の計7か国から合計58名の参加がありました。

当研究所からは、仲田資季准教授と筆者の2名が講師として、また、総研大生2名も参加しました。今回の冬の学校では、総研大・核融合科学専攻として、40分の基調講演、80分の講義を2コマ、60分の問題演習を1コマ、60分の講演を1コマ実施しました。40分の基調講演では、筆者が当研究所で行われているステラレータ型閉じ込め磁場配位研究の現状を報告しました。そのほか、プラズマ・核融合を実現する上で解決しなければならない電磁流体力学と乱流の基礎から、理論・シミュレーションについての講義、総研大・核融合科学専攻の紹介が行われました。ASPNF側からは、タイ・フランスなどにおける核融合研究開発の現状につい

ての講義、さらに、フランスに建設中の国際熱核融合実験炉ITERの現状と将来についての講演が行われました。また、チェコ共和国・プラハ工科大学に設置されているGOLEMTカマク装置を活用した実験演習なども行われました。

参加した学生は大変熱心で、活発な質疑応答が行われたほか、講義時間外にも多くの学生が質問を寄せるなど強い意欲を感じました。総研大への進学についても多数の質問を受けました。今後、多くの学生が核融合科学専攻に志願してくれることを願っています。ワライラック大学があるタイ南部は南国情緒があふれ、バンコクのような大都市とはまた違った趣がある、自然豊かな地域です。素晴らしい環境の下で冬の学校を開催するに当たり、TINTとワライラック大学のスタッフ及びサポート学生の皆様には親身にご協力いただきました。中でもTINTのThawatchai Onjun常務副理事、Somsak Dangtip研究主幹、ワライラック大学のMudtorlep Nisoa准教授に深く感謝いたします。

（核融合理論シミュレーション研究系 准教授）



仲田資季准教授による専攻紹介。多数の質問がありました。



参加した総研大生